

## 井上士朗の書簡の紹介

——道木正信氏コレクションから——

### はじめに

本稿では、名古屋守山郷土史研究会を主催される道木正信氏のご厚意により、同氏コレクションの内、井上士朗の書簡十八点中、紙面の都合で、十一点を紹介する。これらから、士朗が発句指導に『去来抄』だけでなく『猿蓑集』を用いたことや、『甲子紀行』の旅に出る前の事情、近郊の門人との句会の準備事情、京阪の俳人たちとの交流などが窺える。とても興味深い書簡群である。

さて、同氏コレクションの内、士朗書簡は、昭和初年に氏の祖父が句会で最優秀賞を受賞した時の賞品一点と、氏がこれまでに収集された十七点の合計十八点である。そして、この内十六点は軸装、二点は捲りである。本稿で紹介する順に列挙すれば、次のとおり。

- 1 宛名不明。九月十五日
- 2 宇洋（大津 塩屋新六）宛 八月十日（寛政・享和期）
- 3 碩外宛 九月十日（寛政・文政期）

### 富田和子\*

- 4 松兄宛 十日（寛政十一（一七九九）年以前）
- 5 菊舎宛 六月三日（寛政・享和期）
- 6 魯隱宛 四月廿五日（寛政期）
- 7 秋湖宛 十月廿七日（享和三（一八〇三）年）
- 8 騏六・巨川・雨滴・満子宛 七月廿日（寛政期）  
（軸は、巨川宛、九月十八日 窓竹斎烏川の書簡と合装）
- 9 帯梅宛 五月廿七日（享和・文化期）
- 10 墨山宛 八月廿三日（寛政・文化期）
- 11 杜石宛 十二月廿日（寛政・享和期）
- 12 兎農（杜農）宛 廿五日（文化八（一八一二）年頃）
- 13 舎員宛 十日（寛政期）
- 14 五雄宛 四日
- 15 宛名不明（寛政・享和期）
- 16 土宅宛 十二月廿七日
- 17 宛名不明 七月十日
- 18 宛名不明。鶴の画入り。（寛政・享和期）

次に、本稿で紹介する書簡十一点の主な内容は次のとおりである。

1では、返信の遅れを詫び、贈り物の礼を述べた後、添削した発句を返す際に、発句には『猿蓑集』をよく手本とし、句に魂を込めるようによく考へて作ることを教示している。そして、所望された年賀の句の短冊を送り、秋の中頃には、名古屋に出てこられるのではないかと期待して待つており、その時には少し風流に関する話をしたいと記す。

ところで、「井上士朗年譜」（寺島徹「連歌俳諧研究」91「安永四（二七七五）年」三十四歳の項）によれば、次のように載る。

板本『去来抄』は、この後も暮雨巷一門の必読書とされた。

後に、士朗は三河の入素に対して、「…今少しは句の御工夫可有候。『去来抄』にてよくほ句の筋を御勘考可有也。（下略）」と句作について、指導している。（年月不明二十一日付入素宛書簡）。

本書簡では、「とかくほ句のいたし方案じ方也。『猿蓑集』をよくく手本として御案じ二可被成候。可然候」と指導するから、どのレベルの門人に『猿蓑集』を勧めたのであろうか。宛先も年月も不明なのが残念である。

2では、大津の宇洋に、三河の方明が世話になった礼を述べた後、芭蕉の「子に飽くと申す人にハ花もなし」を例に挙げて、宇洋の句を賞賛している。末部の句「かならずや暮て雁啼門田かな」は、宇洋が編者の一人である『枇杷園句集』（文化元年（一八〇四）年序）に収められている。本書簡から収載したのであれば、本書簡が初出か。

3では、半年ほど前に受けた近郊の門人の訪問と今回の贈り物の礼を述べた上で、発句を優しく添削している。そして、再度の訪問

を期待する内容である。

4では、短い書簡の中に、士朗の高弟で同門五老の一人と呼ばれた松兄や暁台没後、士朗門に入り、その重鎮となった岳輅との親しい関係が窺える。

5の宛先は「菊舎主」。「主」は尊敬の度はさほど高くないが接尾語として使われるから、ここは菊舎尼のことであろう。当時、菊舎尼は京都にいたのであろう。しかし、文面から「菊舎主」を「菊舎の主人」のこととみれば、俳書を多く出版した京都の書肆菊舎太兵衛（俳号 其成）とも考えられようか。理由は、後述する。もしも宛先が菊舎太兵衛のことであれば、本人宛に「其成へもよろしく。此間本の事申遣候。はやくよこせと御頼可被下候」「其成へも御はなし可被下候」などと書き、とぼけた言い回しをしたことになる。

士朗の人柄と、其成との親しい関係が窺われておもしろいことである。6では、大坂の宗匠たちとの交流が窺える。なお、「衣がえ空也の瘦やわびつらん」は、未詳句。

7は、書簡が八ヵ月も遅れて届いたことわって、「当冬ハ福原の旧跡を御尋申度候。ぜひとも出兵庫可致と存候処あまく寒気の比成申候へば又々春へと延し申候」と、冬に予定していた旅を、寒いころなので来春に延ばしたと理由を語る。この旅はおそらく文化元年（甲子）二月から三月に卓池・松兄と共に、大坂・須磨・明石・奈良など各地の俳人を探ねた『甲子紀行』の旅であろう。

8は、清洲寄せの巻と他の句会を並行して準備する慌ただしい状況が窺える書簡である。『暮雨巷暁台の門人』（服部徳次郎著 愛知学院国語研究会 一九七二年）に、「騏六・琴宇の一家に占められていた清洲俳壇も寛政期に入ると、閉息状態を脱皮して雨滴・巨川・満子ら田中町・本町などの町家の新しい人たちが現れるようになり、

寛政三年の「暮雨巷月次五題」に（入集）（中略）。寛政四年正月廿日、晩台没、桐仙寺修行の俳諧之百韻に満子・巨川・雨滴も連坐（中略）。二月廿八日に満子は驥六と『ふくさ貝』のたびをした」とある。本書簡から晩台没後、士朗が清洲俳壇を引き継いだことが窺える。

9は、翌日の発免の追善会に参加できなくなった連絡。故人の思出を書き添えている。

10は、冒頭で医師らしい配慮が窺え、また、旅の舟中でのエピソードを面白く伝えている。「蓬生の宿にも秋の戸口哉」は、未詳句。

11では、杜石を通して、当時の江戸南画界の大家であった谷文晁の画を手に入れたことが窺え、春になったらまたお願いしたいと依頼している。

# ○凡例

翻刻にあたり、読解の便をはかって、次のように扱った。

一、書簡の見出しは、もつとも一般的な人名、俳号を示した。

一、濁点、句読点を施した。ただし、原文にあるものと、恣意に施したものとを区別していない。

一、異体字を含めて漢字は原則として通行字体に改めた。ただし、例外もある。

一、慣用・誤用の漢字や仮名遣いは、誤解のないと思われるところはそのまま残した。

一、（ ）内の文字及びルビは、恣意に施したものである。

一、原文の改行箇所を／で示した。原文の改行に従った場合はこれを略した。

一、寸法は、軸装のものも含め、書簡の寸法のみを記載した。

一、書簡ごとに、簡単な注を記した。参照又は引用に際し使用した

書籍の書誌情報は、本稿末尾に主な引用文献としてまとめて記した。

一、士朗の事績については、寺島徹「井上士朗年譜」（『連歌俳諧研究』91）に従った。

## 1 宛名不明。九月十五日

（軸装。上段一六・七×四七・五糎、下段一六・八×四七・五糎）

追々と御文被下／御は句等もしバ／披見いたし候。早々にも／

御返事可申処／日々

の紛冗、大／延引、

御用捨／可被下候。

前度いろ／＼の／

品、御贈被下辱／奉

存候。御礼申出候。

此外ハうちこミ／

／おき候を一所に見

／出候。引墨いたし

／さし上申候。とか

／案じ方也。

猿蓑集を／よく

／手本として／御

案じ可被成候。／可

然候。句ニ魂入／不

申様存候ま、／句に

三九

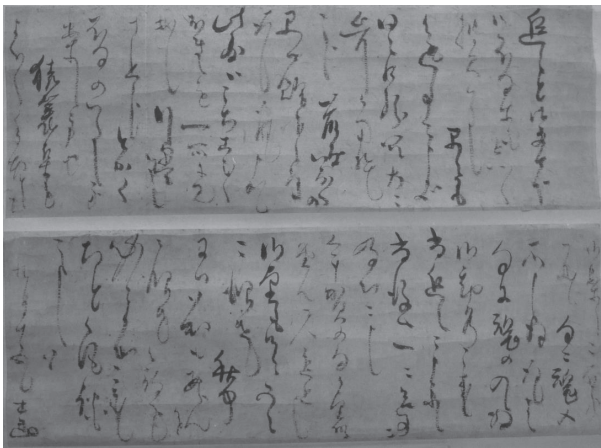


図1 宛名不明。拾月十五日（軸装）

魂の入候様／御勘考<sup>(3)</sup>可被成候。／尚追々可申承候。／尚後<sup>(2)</sup>御返事<sup>(1)</sup>及び可申候。

年賀の句御望故／たん尺進上可申候。／御望も候ハゞ又々／可仰遣候。秋中／にハ御出もあらんかと／可仰遣御待申候。／必々御出可被成候。／ちと御風談<sup>(4)</sup>／可申候。以上

九月十五日 士朗

(1) 紛冗(ふんじょう)「名」みだれること。ごたごたしてもつれること。

(2) 引墨「名」添削すること。多く俳諧用語として用いられる。

(3) 勘考「名」考えること。思いをめぐらすこと。また、考え。思案。

(4) 風談「名」風流に関するはなし。

## 2 宇洋(大津 塩屋新六)宛 八月十日(寛政・享和頃)

(軸装。一五・一×八七・〇糎)(図2)

方明<sup>(2)</sup>此せつ／参上又々御世／話辱候。坂本<sup>(3)</sup>／高嶋<sup>(4)</sup>などへも／御進<sup>(1)</sup>被遣可被下候。／奉頼候。以上

八月十日 士朗

宇洋様

みどり子もねず<sup>(3)</sup>の／花見る便かな

とハ甘心いたし／申候。翁の／「子にあくと申／人にハ花もなし<sup>(6)</sup>」

と／被申候。是等<sup>(2)</sup>／たより申候へば／猶更嬉しく／甘吟いたし申

候。／信<sup>(1)</sup>真心也。／甘心<sup>(1)</sup>。以上

かならずや／暮て雁啼／門田かな<sup>(2)</sup>と

申出候。

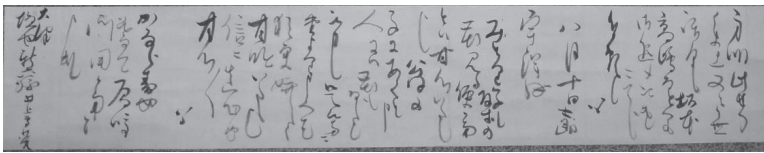


図2 宇洋(大津 塩屋新六)宛 八月十日(文化元年以前)(軸装)

大津／塩屋新六様 井上専庵

(1) 宇洋(塩屋新六)＝大津の人。『枇杷園句集』(士朗の発句集。椿堂・宇洋・卓池・蕉雨・松兄編。文化元(一八〇四)年序)編者の一人。享和二(一八〇二)年刊『時雨会』の巻頭連句で発句を詠む。

(2) 方明＝三河田原の藩士、致仕して俳諧を士朗に学ぶ。寛政八年(一七九六)の『松の炭』が初見。文化十三年の『風の筋』に入集を最後とする。五雄と共編の『秋風紀行』(文化元年)の著がある。文化年間(一八〇四～一八一七)没。(『中京俳人考説』)

(3) 坂本＝(比叡山のふもとにあるところから)滋賀県大津市の地名。旧滋賀郡坂本村。延暦寺及び日吉神社の門前町、北陸街道に沿う琵琶湖西岸の港町として発展した。

(4) 高嶋＝滋賀県北西部の郡名。琵琶湖の西岸にある。西近江路が南北に通じ、今津から若狭街道(九里半街道)が分かれる。

(5) ねずの花＝【杜松】「名」ヒノキ科の常緑低木または高木。本州、四国、九州の丘陵などの日当たりのよい所に生え、庭木や盆栽ともされる。(中略)春、葉腋に小さな単性花をつける。果実は径一センチメートルたらずの球形で紫黒色に熟し、漢方では杜松子(としょうし)といい利尿薬に用いる。(中略)和名は「ねずみさし」の略で、とがった葉が鼠を刺して防くということによる。ねずみさし。むろ。むろのき。

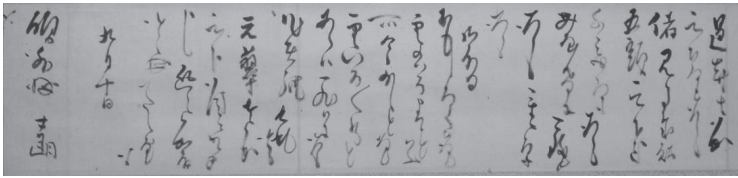


図3 碩外宛 九月十日（寛政～文政期）（軸装）

3 碩外宛 九月十日（寛政～文政期）

（軸装。一六・〇×七三・八糎）（図3）

- ねずの花に、幼児が寝ない（寝ず）を掛けるか。  
 (6) 子に飽くと申す人にハ花もなしハ芭蕉句。『類柑子』『俳諧一葉集』に所収。  
 (7) 「かならずや」の句ハ『枇杷園句集』他に入集。

過春者御出／被下辱奉存候。  
 偕見事成鮎／五頭可被下候。／千萬辱奉存候。  
 ／みやげに可致と／奉存候。重々辱／存候。  
 御ほ句

おもしろく奉存候。／雲のいろまでといふ／  
 所今少しと奉存候。／雲いろくのと／あら  
 バ可然かに奉存候。  
 乍失礼貴札とも／元蓼老か／モト御目ニか、  
 り／申候。近々御出府／以、再いたし度候。  
 以上

九月十日

碩外様 士朗

- (1) 碩外ハ巴梁（起の脇本陣・林定通の子）の養子で、諱を重政、通称を唯助、後に浅右衛門と称して天明八（一七八八）年に家督相続。文政十（一八二七）年十月廿二日没、七十四歳。起俳壇。寛政十一（一七九九）年

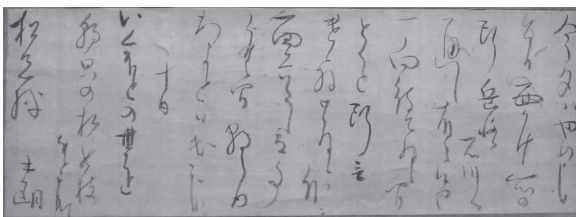


図4 松兄宛 十日（寛政十一（1799）年頃）（軸装）

4 松兄宛 十日（寛政十一（一七九九）年以前）

（軸装。寸法 一五・〇×四三・六糎）（図4）

- の仮題『暮雨巷臥史撰句集』（臥史撰）に入集。（『暮雨巷曉台の門人』一八八頁・一八九頁）  
 [参起]（おこし）ハ愛知県一宮市西部の地区。木曾川東岸に位置し、美濃路の宿場町、木曾川渡船場を兼ねる河港で、本陣、脇本陣、問屋場もあった。結城縞、土人形を産し、毛織物工場が多い。濃尾大橋で岐阜県羽島市と結ぶ。（『日本大百科全書（ニッポニカ）』）  
 (2) 元蓼ハ未詳。

今夕ハやめ申候。／今日西かけ所の／断、  
 岳輅、石川へ／通し有之候也。／一向待  
 てる候間／とくと断言／遣候様可存候。  
 外／面上いたし度事／御座候間、朝之  
 内／ちよと御出可被下候。

十日

いくほどの世を／朝顔の松の枝  
 など申出候。

松兄様 士朗

- (1) 松兄ハ明和四（一七六七）ハ文化四（一八〇七）、四十一歳。本名、義海。別号、木犀居。尾張国名古屋西別院内正覚寺一〇世。士朗の高弟で、同門五老の一人。享和元年（一八〇一）の『鶴芝』の旅に卓池とともに随行。編著『な、



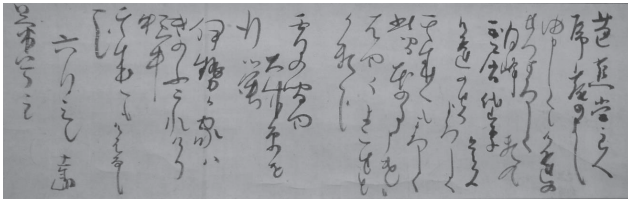


図5 菊舎宛 六月三日(寛政・享和頃)(軸装)

しぐさ』。(下略) (『俳文学大辞典』)

(2) 西かけ所(西掛所) 〓本願寺名古屋別院(現、名古屋市中区内)のこと。文化十四年、葛飾北斎の大達磨絵の興行で有名。

(3) 岳輜〓? 文政四(一八二二)、享年七十余(『博天集』)。本名、秀円。別号、虎足庵。法名、釈源恵。尾張国名古屋西寺の十二世。晚台門五老の四。本居宣長の門に入り国学を修める。晩台没後、士朗門に入り、その重鎮となる。岱青と晩台の七回忌『法々華経』を撰する。編著『春鶯囀』『かむこ鳥集』『雪岱』。(下略) (『俳文学大辞典』)

(4) 「いくほどの」の句 〓『みどりのまつ』(寛政十一(一七九九)・三日月集(享和二(一八〇二)年)『枇杷園七部集』三編(文政八年所収)・『枇杷園句集』(文化元年)他に所収。

## 5 菊舎宛 六月三日(寛政・享和頃)

(軸装。一四・九×五八・四糎)(図5)

芭蕉堂主人(3)ノ帰庵のよしノゆかしく候。御逢の(3)せつよろしく頼入候。ノ月峰(3)ノ玉屑(3)、岱李(3)、是又ノ御逢のせつよろしくノ其成へもよろしく。ノ此間本の事申遣候。ノはやくよこせとノ御頼可被下候。ノ

宵の間やノ大竹原をノ行蛭(8)

伊勢が家ハノきのふうれけりノ蝸牛

其成へも御はなしノ可被下候。  
六月三日 士朗  
菊舎主

(1) 菊舎 〓菊舎尼。宝暦三(一七五三) 〓文政九(一八二八)。長門国豊浦郡生れ。安永五年(一七七六)に夫と死別し、得度。その後、其音門(長門国)から美濃派宗匠傘狂門。芭蕉らの足跡を訪ねる旅に出る。天明四年(一七八四)に帰郷すると、同六年には九州へ旅立つ。以後、生涯を旅に送り、その間京都では西園寺賞季ら公卿らとも交わる。文化九年(一八二二)『手折菊』刊。(『俳文学大辞典』抜粋)

なお、はじめに各書簡の特色で述べたように、文面から「菊舎主」を「菊舎の主人」のこととみれば、俳書を多く出版した京都の書肆菊舎太兵衛(一七五三頃?)とも考えられようか。なぜなら、菊舎太兵衛は其成と号する俳人でもある。士朗の書簡ではないが、『書簡による近世後期俳諧の研究』(八六四頁)で紹介される二柳の雲帯宛書簡に「此度之御状に其成迄指出可申候由被仰下候故菊太へ相瀬遣候」とあり、一書簡の中で、菊舎太兵衛について、俳人と書肆主人とを書き分けた例があるからである。そして、菊舎太兵衛の創業は天明五(一七八五)年頃で、その顧客は「始め關更・車蓋とその門友が多く、後年その中心は玉屑関係に移るが、京内外の重厚・青蘿・紫暁・月居・定雅等は勿論、遠く晩台門にまで及んだ」(『日本古典文学大辞典』)とされ、書簡に載る玉屑と菊舎太兵衛の関係の方が菊舎尼に比べて近いと思われるからである。更に、尾張系俳書の『なこやの月』(双南序・編、双南の帰洛記念集。寛政十一年刊)に跋文「士朗統七部集」(文政七年刊)の編者(本書所収「枇杷の実」(文政四)に序)と、士朗との関わりが、菊舎尼に比べて強いと思われるからである。

繰り返しになるが、もしも宛先が菊舎太兵衛のことであれば、本人宛に「其成へもよろしく。此間本の事申遣候。はやくよこせと御頼可被下候」「其成へも御はなし可被下候」などと書き、とばけた言い回しをしたことになる。士朗の人柄と、其成との親しい関係が窺われておもしろいことである。

(2) 芭蕉堂二初世は、高桑闌更一(享保十一(一七二六)〜寛政十(一七九八)年)。京に定住して南無庵および芭蕉堂を営むのは天明三(一七八三)年。二世は、成田蒼虬一(宝暦十一(一七六一)〜天保十三(一八四二))。寛政十年に闌更が没すると、すぐに京東山芭蕉堂を継ぐ。『日本古典文学大辞典』。

(3) 月峰二闌更門。一茶編『たびしうゐ』(寛政七年)歌仙に連座。

(4) 玉屑二宝暦二(一七五二)〜文政九(二八二六)。僧侶。肥後熊本の人と伝える。淡路国普濟寺・播磨国米田村神宮寺・同加古川光念寺・筑紫榮福寺などの住職を歴任した。『俳文学大辞典』

(5) 岱李二『しぐれ会』文化十年・文政三年・同九年・同十年に入集(『時雨会集成』)。京都四条寺町西へ入。菊屋卯兵衛か。『嘉永人名録(写本)』嘉永六年(『板倉塞馬全集』所収)。

(6) 其成二京都の書肆、菊舎太兵衛。5注(1)参照。

(7) 「宵の間や」の句二『枇杷園句集』(文化元年)他に所収。

(8) 「伊勢が家ハ」の句二『枇杷園句集』(文化元年)他に所収。

## 6 魯隱宛 四月廿五日(寛政期)(図6)

(軸装。上段一六・〇×五三・〇糎、下段一五・五×五三・〇糎)

南無天満大／見事成竹自在／被贈下候。庵中／の重器三といたし候。／大よろこびまゐらせ候。／去冬舟うつし給り／候よし。されば海に／千年山にといふ／めでたきものに御座候。／萩の枯枝さ、の／落葉焚出申候／て俳事を相楽ミ／可申候。／山々辱御座候。ちか頃ハ甚とりこミ／長才君へ文だに／得出し不申候。甚／疎懶三の事可然／御希候。千度の／文ハ通ねど心ハ／只に波浪速に御座候。ちか頃、松兄被参／定而御世話被下候と／御座候。さく日帰／国のさいまだ／得逢不申候。波匠六の／はなしを聞んと／今夕ハおしか

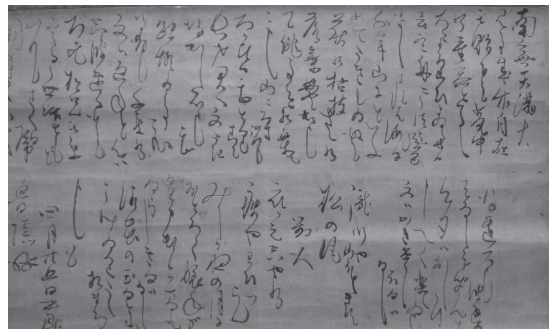


図6 魯隱宛 四月廿五日(軸装)

け／申べく楽ミゐ申候。／文ハかきたしほ句ハなし  
瀧川や山ほと、きす／松の風二  
対人  
衣がえ空也の／瘦やわびつらん三  
みじか夜の月に／おどろく旅ね哉三  
など申出候が一句も／句らしき句ハなし。／浪花の玉句とも／うけ給りたく相まち／申候。  
以上  
四月廿五日 士朗  
魯隱様

(1) 魯隱 大坂今橋通の人。山形長康。柿壺連の一員。『秋の日三歌仙』(「一草編・長斎跋 文化五(一八〇八)年」に序『士朗続七部集』下巻(文政七年刊)所収)。長斎門。

(2) 竹自在(たけじざい)〔名〕竹で作った自在鉤。「南無天満大」は、菅原道真の神霊に帰依することは「南無天満大自在天神」から「竹自在」を導く枕詞としたか。

(3) 重器(じゅうき・ちようき)〔名〕貴重な器具。大切な宝もの。

(4) 長才(長斎) 宝暦七(一七五七)〜文政七(一八二四)。大阪の人。俳諧は大魯に(中略)学ぶ。秋田俳壇と親交があり、文政四年には秋田に引杖した。(下略)『俳文学大辞典』魯隱の師。『秋の日三歌仙』(「一草編・魯隱序 文化五年(一八〇八)」に跋。

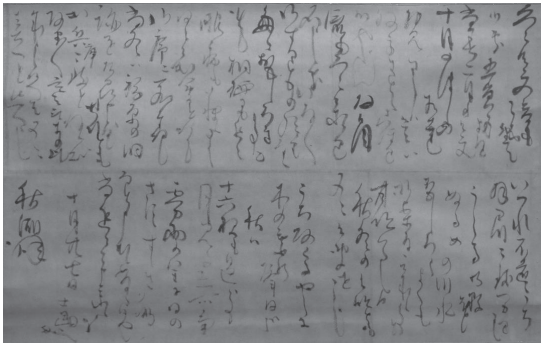


図7 秋湖宛 十月廿七日〔享和三（1803）年〕（軸装）

久々の御文音もうちたえ／候  
 処五寅方より／当春二月の御  
 文／十月のはじめ相達／拝見  
 いたし候。さてハ／何方に  
 とゞこほり／候也らん。  
 扱御風／流も久々承り／不申  
 候処いろ／御すりもの給  
 り辱／毎々おもしろき事  
 御座候。桐栖にも追々／眼病  
 も御快候よし／日々御出会か  
 と存候。／御序ニ可然奉存候。  
 当冬ハ福原の旧／跡を御尋申  
 度候。ぜひとも／出兵庫可致  
 と存候処／あま／寒気の比  
 ／成申候へば又々／春へと延

7 秋湖宛 十月廿七日〔享和三（一八〇三）年〕

（軸装。上段・下段共、一六・三×五三・七糎）（図7）

- （5）疎懶（そらん）〔名〕（形動）なまけること。また、そのさま。無精。
- （6）波匠 浪速の宗匠のこと。
- （7）「瀧川や」の句＝『拾葩日記』〔梅老稿本 文化八（一八一）年〕他にあり。
- （8）「衣がえ」の句＝未詳句。
- （9）「みじか夜の」の句＝『月夜ほとけ』〔享和元・類題士朗叟発句集』（文政八）に所収。

し申候。／いづれ不遠うち／拝眉可致つもりに候。  
 うし馬の数ほど／ぬるめの川水  
 おもしろくよくも／御案付可被成候事と／甘吟いたし候。／秋冬の  
 貴吟とも／又々御聞せ可被下候。

秋ハ

十六夜も過て／月見る在所かな  
 霧雨の里に日の／さすすゝきかな

など申出候。秋の日也。／尚追々可申承候。以上

十月廿七日 士朗  
 秋湖様

- （1）秋湖＝『しぐれ会』宝暦十三年・明和元年・同五年・同六年に入集（『時雨会集成』）。
- （2）五寅＝暁台が京に滞在した寛政二年二月より同三年八月までの発句を撰んだ「暮雨巷月次五題」寛政三（一七九二）年に入集（『中京俳人考説』十一頁）。『麻刈集』（士朗撰 寛政五年）に入集。
- （3）桐栖（きりすみ）＝生没年未詳。享和／文政（一八〇一～五〇）ごろ。本名、仁木竹輔。別号、五彩堂。大阪の人。矩州門。編著『木魂』（士朗七部集）ほか。（『俳文学大辞典』）
- （4）当冬ハ福原の旧跡を＝おそらく文化元年（甲子）二月から三月に卓池・松兄と共に、大坂・須磨・明石・奈良など各地の俳人を尋ねた『甲子紀行』の旅であろう。（井上士朗年譜）
- （5）「うちあぐる」の句＝『初時雨』（享和三（一八〇三））に所収。
- （6）「十六夜も」の句＝『枇杷園句集』（文化元年）他に所収。
- （7）「霧雨の」の句＝『枇杷園句集』（文化元年）他に所収。



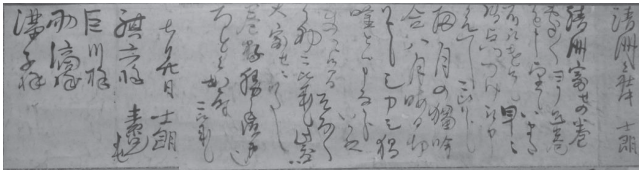


図8 騏六・巨川・雨滴・満子宛 七月廿日(寛政期)(軸装・上段)

8 騏六・巨川・雨滴・満子宛 七月廿日(寛政期)

(軸装。上段(端裏)一六・〇×五・三厘、一六・〇×五五・〇厘、下段一四・三×五五・三厘)(図8)

〈端裏〉清洲御社中 士朗

清洲寄せの巻／廻くヨリ返巻／進申望候。いまだ／取次遣可申候。早々／御点つけ次第／御返し可被下候。

扱月の独吟／合八月晦日切／御座候。シカシ独／喰とハ申なごらい  
かぬ／もの候間、そろ／御初可被成候。  
此度ハ／大寄せいたし候。／巻数勝手次第  
也。／ちと御出府可被成候。

七月廿日 士朗／素兄よせ

騏六様／巨川様／雨滴様／満子様

(1) 騏六 元文元年(一七三六) 六月四日(文化七年(一八一〇) 八月廿二日。海東郡百島村生まれ。西春日井郡清洲で逝去。七十五歳。姓 武田。名 載紹。通称 笹屋長兵衛。号 騏六・福田舎。墓地 海部郡美和町木田福田寺。法名 諦教院釈誓念。清洲神明町の叔父長兵衛のあとを継いで六代目となり、酒造を業とする。俳諧は荷兮の筆になる長虹の巻いた「秋の日」の歌仙を手みやげに、先輩琴宇と共に暮雨巷に入り、晩台の財政的後援者となる。その没後は士朗につき、寛政四年(一七九〇)二月に満子・羅城と須磨明石に旅した『ふくさ貝』の著

がある。朧夜梅月うき行あかし濁(『中京俳人考説』)

(2) 巨川 小林巨川。清洲の人。騏六・琴宇の一家に占められていた清洲俳壇も寛政期に入ると、閉息状態を脱皮して雨滴・巨川・満子ら田中町・本町などの町家の新しい人たちが現れるようになり、寛政三年の「暮雨巷月次五題」に(入集)(中略)。寛政四年正月廿日晩台没、桐仙寺修行の俳諧之百韻に満子・巨川・雨滴も連坐(中略)。二月廿八日に満子は騏六と『ふくさ貝』のたびをした。(中略)旅の力草に雨滴・巨川が入集。同五年の士朗撰『麻刈集』に(入集)(下略)。(『暮雨巷晩台の門人』一八二頁)

(3) 雨滴 清洲の人。『麻刈集』に入集。8注(2)「巨川」参照。

(4) 満子 晩台門。寛政年間、清洲(『中京俳人考説』一五五頁)。騏六と『ふくさ貝』(騏六編。紀行句文集(寛政四年二月二十八日出発)の旅をした。『麻刈集』の春雨の巻に連座、発句入集。8注(2)「巨川」参照。

(5) 素兄 寛政十一年(一七八九)四月十一日没。号 素兄・松朧軒。墓地 名古屋新栄町宝泉寺。法名 成遵索光禪定門。天明三年(一七八三)の白尼歳旦に松朧軒として初見。のち暮雨巷に参加して、同七年の「つまじるし」に入集。寛政二年(一七九〇)の二条家御中興俳諧に出席した。晩台の没後士朗につく。文化六年(一八〇九)の「口笛集」に入集しているが、寛政十二年の「玉くしげ」が最後かと思われる。夜はしりの沖に楫かふ千鳥哉(『中京俳人考説』)

9 帯梅宛 五月廿七日(享和・文化期)

(軸装。一六・〇×六九・〇厘)(図9)

明廿八日発兎／追善御催行／まわり度候へ共／叶ひ不申候。よつて／ほ句を送り申候。／御手向可被下候。／酒とはいかに一生／をわすれたる／人にて候。おもひ出候。

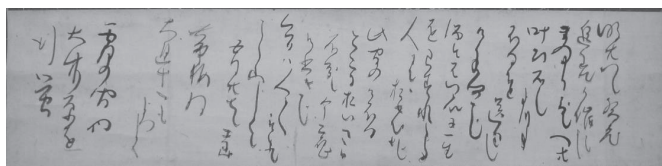


図9 帯梅宛 五月廿七日(寛政・享和期)(軸装)

此間の御は句／どこにおいたか／不分候。今可然／御書キ可申候。

今日八人／被参候／うら山しく候。

五月廿七日 士朗

帯梅様

大阜へもよろしく

宵の間や／大竹原を／行堂<sup>③</sup>

(1) 帯梅<sup>②</sup>？→文政九(一八二六)。享年は六九前後か(『東君』から推定)・本名、村瀬祥副。通称、両口屋弥四郎。別号、狐塚。

古観・暮雨巷三世。尾張国横須賀の人。暁台・士朗門。臥央に次いで暮雨巷三世を襲名。編著『明

ぼの日記』『竜の登』『鶴頭集』『九駄加計』。(『俳文学大辞典』)大阜は従兄弟。

(2) 発免<sup>②</sup>生没年未詳。尾張国横須賀の人。

天尾崎社中。『明ぼの日記』(『帯梅編 寛政四(一七九二)年』の歌仙に連座、兆如の『初時雨』(享和三(一八〇三)年序)の歌仙の次韻にも参加するので、享和年間までの生存は確実とされる。『松の碑』『送別しをり萩』(『暁台編 明和七

(一七七〇)年』『東君』『夜のはしら』『天明九歳旦』『寛政三正月暮雨巷撰』『落梅花』『清友篇』『こもかふり』などに散見されて、比較的古くから足跡を残す。『尾張の俳諧』一九二頁他)

(3) 大阜<sup>②</sup>延享二(一七四三)→文政三(一八二〇)・九・七、七十六歳。村瀬氏。通称、兵庫屋弥四郎・弥五助。別号、海翁・蝸庵。尾張国横須賀の書肆。暁台門、のち士朗門。士朗門五老の一人。従弟の帯梅を助け、知多俳壇の重鎮として活躍。編著『こもかふり』『刈葎』『清

友篇『於宝路夜』『泣瓢集』。図「蒼天に鳥の道ありほととぎす」(『枇杷園小集』)。(『俳文学大辞典』)

(4) 「宵の間や」の句<sup>②</sup>『枇杷園句集』(文化元年)他に所収。

10 墨山宛 八月廿三日(寛政・文化期)

(一七七×一七八〇糧)(図10)

捧願<sup>③</sup>の歯痛も大／御快候段賀し奉候。／葉ハやはり前方御／用ひ被成候がよし。／腹裏の熱<sup>②</sup>候へば／常<sup>②</sup>も先楊子御用／おき候がよし。一壁土も御出来候よし。／さぞ／可然ものなり／可申候。

(挿絵)

此やうな木をかきおしすへ／申候。濃淡かきまぜ／申度候。扱既望にハ／さん／の付合にて／辰巳村とやいふ処／に舟を泊、其上ハ一寸も得出不申候と／舟人の手が痺／申候。是をいかゞといふに／此ほど黄胖<sup>③</sup>といふ／病の起たる人を／辛くして雇ひ出／たるなるよし。只／南のかたを見やる／ばかりにむなしく／出会をそむき失／敬と申くらし候。

横スカハ出不申候由／是ハおくれ申候。玉／士・維の三子<sup>③</sup>へも／可然奉頼上候。されど／予が徒の舟中ハ／ちかきものハ目にも／見よ、遠きものハ音／にも聞らん人々にて／舟中、画・詩・哥・句／さまざま／とてはやし／一卷の巻物となり／申候。今日さし上可／申と存候処、誰／やらがもて行、其上／明倫堂の人々が／其跡をしたひ／申て、序を書の／跋を書のとひしめき／申て果さず、近日／御目<sup>②</sup>かけ可申候。

一村雨は月の中より／に涙をこぼし申候。文章も甚よく／御出来に候。人々が／しきりゆかしくなり／申候。ちか比の文章／為也。今

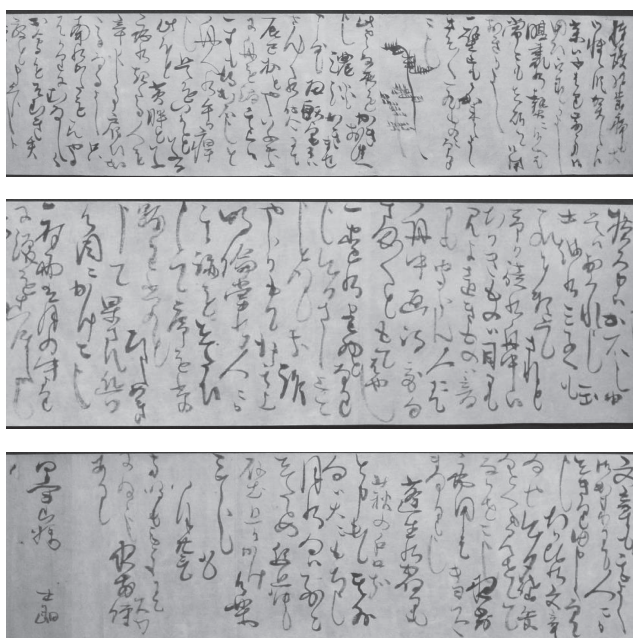


図10 墨山宛 八月廿三日(寛政～文化期)

夕、岱・岳<sup>(8)</sup>などへも見せ候て／なかせ可被申候。夜前<sup>(9)</sup>／痛用にて  
キヨスへ／まゐり申候。

蓬生の宿にも／萩の戸口哉<sup>(10)</sup>

と申出候。其外／句ハ大ニもち申候。／月の句ハ別ニ／した、め進  
上仕候。／壁旦(上)にかけ御楽／可被下候 以上

八月廿三日

方明も無事にてスワ／にあ可申候。夜前評／あり申候。

墨山様

士朗

- (1) 墨山<sup>11</sup>生年 延享三年(一七四六) 八月。没年 文政二年(一八一九) 四月十九日。享年 七十四。姓 山口。名 延年。字 千秋。通称 九郎左衛門。号 墨山・墨樵・墨尚・風塵翁・緑竹斎。墓地 名古屋市緑区大高町春江院。法名 墨山道翰。百済余璋王の後裔で、余氏と称する知多郡大高の旧家、六代目のあるじ。篆刻にもっとも名があり、墨画をよくした。俳諧は晩台に学んで句作したが、篆刻に害があるとして休止。寛政初年(一七八九)より再びはじめた。晩台の没後は士朗につき、同八年(一七九五)三月に鳴海千代倉の芭蕉像を彫刻し、その開眼供養に会頭として執行した。句稿『緑竹集』がある。芦鴨の足水かゝる昏子哉(『中京俳人考説』)
- (2) 捧頤(ほうい) 頤杖をつく。(『字通』)
- (3) 辰巳村<sup>12</sup>現在の長浜市山階町か。(『日本歴史地名大系』)
- (4) 黄胖<sup>13</sup>黄疸に似た病氣。(『古事類苑』方技部 洋卷 第1巻 一四六二頁『療治茶談』)
- (5) 玉・士・維の三子<sup>14</sup>玉・士・維は、俳人三名の俳号の一字目で、三子は、三名の意か。
- (6) ちかきものハ目にも見よ、遠きものハ音にも聞らん<sup>15</sup>「遠からん者は音にも聞け。近き者は目にも見よ。見えない者は声を聞け、近くの者はよく見よの意で、武将が合戦をするときに、名乗りをあげる最初のことば。
- (7) 尾張国(愛知県) 尾張藩の藩校。寛延元年(一七四八)設置のものを基に、天明三年(一七八三)、徳川宗睦が開設。漢学・音楽・算術を科目とした。明治二年(一八六九)、洋学校を設立。
- (8) 岱岳<sup>16</sup>岱青と岳輅(4の注3参照)のことか。岱青(？)寛政十一(一七九九)。台界の子・本丸番を勤める尾張藩士。本居宣長の門に入り国学を修め、また乱舞を好んで『続俳家奇人談』に名をとどめる。晩台門の高弟。晩台没後、士朗門。(『中京俳人考説』より抜粋)

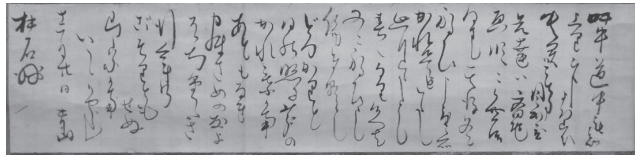


図11 杜石宛 十二月廿日(寛政・享和期)(軸装)

- (9) 夜前〓昨夜。  
(10) 痛用〓「痛痒」(さしさわり)か。  
(11) 「蓬生の」の句〓未詳句。

11 杜石宛<sup>(1)</sup> 十二月廿日(寛政・享和期)  
(軸装。一五・〇×六五・二種)(図11)

呼牛道中無恙／上り被下候よろこび／貴君御  
無事目出度。  
先達ハ文晁／画段々御世話／辱候。其後冬／  
ねがひ申度候所／かれ是といたし／延引いた  
し申候。／春へなり候へば／又々ねがひ申候。  
／偏奉頼申候。／  
どつかりと／日の照る芦の／かれ葉かな<sup>(2)</sup>  
あともなき／寝ざめの友よ／はちたゝき<sup>(3)</sup>  
行年の／ごそりともせぬ／山家かな<sup>(4)</sup>  
いかゞやらん。  
十二月廿日 士朗  
杜石様

- (1) 杜石 『青むしろ』(竹有編 文化元年)に序。江戸の人か。  
(2) 呼牛〓関八洲・上総東金上宿 野間屋か。『嘉永人名録(写本)』  
嘉永六年(『板倉塞馬全集』所収)。  
(3) 文晁〓谷文晁。江戸後期の画家。江戸南画界の大家。(中略)代  
表作『公余探勝図巻』『帰去来図』。画論に『文晁画談』など。宝暦  
十三(一七六三)〜天保十一(一八四〇)年。  
(4) 「どつかりと」の句〓『枇杷園句集後編』(文化九年)他に所収(日

- の出る」か)。  
(5) 「あともなき」句〓『枇杷園句集』(文化元年)他に所収。  
(6) 「行年の」の句〓『枇杷園句集』(文化元年)他に所収。

## 主な引用文献

市橋鐸・服部徳次郎『中京俳人考説』東海文学資料刊行会 一九七七年  
服部徳次郎『暮雨巷曉台の門人』愛知学院国語研究会 一九七二年  
寺島初美『尾張の俳諧』愛知県郷土資料刊行会 一九八七年  
矢羽勝幸『書簡による近世後期俳諧の研究』青裳堂書店 一九九七年  
大内初夫監修・義仲寺編『時雨会集成』義仲寺 一九九三年  
深津三郎編『板倉塞馬全集』私家版 二〇〇三年  
寺島徹『井上士朗年譜』『連歌俳諧研究』91 一九九六年  
『俳文学大辞典』角川書店 一九九五年  
『日本古典文学大辞典』岩波書店 一九八三〜一九八五年  
『日本国語大辞典』・『日本大百科全書(ニッポニカ)』・『日本歴史地名大  
系』・『字通』・『古事類苑』は、ジャパンナレッジ  
(<http://japanknowledge.com/personal/index.html>)に於ける。

## 付記

貴重な資料をご提供いただいた道木正信氏に謝意を表します。そして、  
士朗の句の出典をご教示いただいた寺島徹先生、翻字に際し、貴重なご  
教示をいただいた加藤定彦先生・寺島徹先生に深謝申し上げます。